

山を  
見るな

山を  
見るな

菊  
村  
到

# な　る　見　る　山

昭和三十四年四月二十一日　初版発行　定価二七〇円

著者　菊村　到

発行者　陶山　巖

印刷者　長久保　慶一

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　井上製本所

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三  
振替口座東京一五六五三番  
万一落丁乱丁の際は、お買求めの書店又は発行所にてお取替致します

## 目次

山を見るな

5

捕虜をいじめたか

57

英雄たち

109

赤いガウン

163

黒い花びら

189

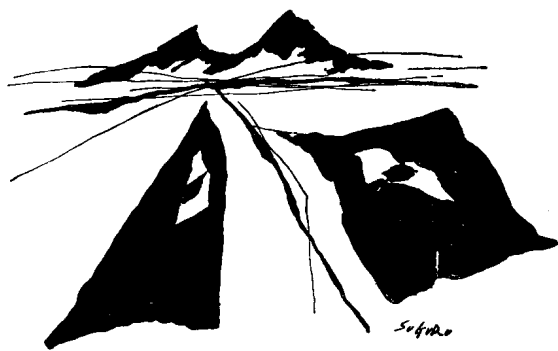
雀と遊ぶ子

225

装帧・カット

勝呂  
忠

山  
を  
見  
る  
な



「文学界」昭和三十四年四月号

ひとは一生のうちに、その時期によって、いくつかのことなつた層の友人を持つことになる。

私の場合について言えば、旧制中学時代、大学時代、軍隊時代、会社員時代といったふうに、ほぼ四つのグループに友人の層もわかれてゐる。目下いちばん親しいつきあいのあるのは、会社員時代の友人である。おかしなもので、ときおり、ふっと、あの男は軍隊のときの友人だったか、それとも大学時代だったか、そのへんがとっさに識別できないくらい、記憶のあいまいになつてゐる場合もある。

小学校のときのおそびともだちや中学時代のクラスメートは、それほどでもないが、大学予科のときの友人と戦友とはしばしば混同されがちで、そんなとき、何となくおれもとしをとつたもんだなという気持になる。

先日、私は大学予科時代の友人の結婚式に招かれて出席した。その男は、式によぶ友人を小学校時代、中学校時代、大学時代、軍隊時代、いまの職場というふうに分けて、それぞれのグループから、二、三人代表をえらんでいた。

私は大学予科のときの友人としてピツク・アップされたわけである。私は自分の結婚式のときは、友人と名のつくものは、ひとりもよばなかつたので、この男の計画的なやりくちには感心させられた。もっとも感心するのは、私が世間知らずだからで、ふつう一般に結婚式の出席者というのは、そういうふうにして選択されるものかもしれない。

旧友というものは、なつかしいものだが、それぞれたがいに社会人になって、生活する場所が切りはなされてしまうと、顔をあわせても、あまり共通の話題がなくて、何となく落ちつかないもののようなのである。とりわけ、私はそういう点で社交性に欠けているので、そんなとき、ひどく気が重くなってしまう。

さて、私を結婚式によんでくれた大学予科時代の友人というのは、服部という男で、げんざいは、グルタミン酸、リジン、ブタノール、酒精、アセトンといったふうなものを生産している醸酵工業の会社につとめている。

服部は経済を専攻した男で、当然その会社でも事務系統のほうの仕事をやっているとおもわれるが、くわしいことは私も知らない。

在学時代、私はこの男とそれほど親しくしていたわけではなかったが、私はかれに何となく親近感を抱いていたことはたしかだった。

私は昔から生活力旺盛で、いつもグループの中心にいてはでうごいているような人間よりも、どことなく弱々しく、ひかえめで、どんなときもあまり得をしたりすることのないような人間に好意を持つ傾向がある。

学業の点でも、自分より成績のよくない者とか、肉体的にもこちらよりも劣弱であるような人間に親近感をおぼえるのである。

自分よりすべての能力においてすぐれているとおもわれるような人間は、どうも苦手である。だまっていかにあっているだけでも圧迫感をおぼえ、劣等感のとりこになってしまう。自分より劣っているようにおもわれる人間となら、いっしょにいても、たいそう気が楽でくつろいでいられる。自分が何となく優越しているような錯覚に甘やかされるからであらうか。

こういうと、いかにも私という人間は弱いものばかりのあいだでお山の大将のようになっていばつていたがる人間におもわれるかもしれないが、かならずしもそうではない。私が私よりも弱い人間（といっても、ただそうみえるだけのことで、じつさいには私より強く、すぐれているのかもしれないのだが）を好むのは、自分のつまらぬ優越感をみたして、自己満足にひたろうというためではない。

強い人間と弱い人間とは、現実や人生にたいする向かいあいかたが、かなりちがうはずであり、私が弱い人間に親しみをおぼえるのも、そういう弱い人間と現実とのかかわりかたに、私の心を強く惹きつけるものがあるからにほかならない。それは私じしん、そういう弱い人間の種族にぞくするからなのだろう、とおもっている。

大学時代、私が、服部に好意をよせたのも、服部が少くとも私の眼には、弱い人間として映ったからなのである。

服部は山形の出身で、服部の家はその地方では名門のようであった。そういうことも、私は結

婚式のときテーブル・スピーチによって教えられたのだった。服部と多少でもつきあいのあったのは、大学予科の時代であり、そのころはいまとちがって、私たちには、学生気分といったふうなものは全く育たなかったし、学生生活は軍隊にはいる手前の一過程にしかすぎないような状態で、私はクラスのだれとでも少しもうちとけようとせず、したがって服部とのあいだにも記憶にのこるほどの事件は何もなかった。

服部は、やせて小がらでいつも青白い顔をしていた。しゃべりかたも、ものしずかで、どちらかといえば、植物的な感じのする青年だった。

いちどこんなことがあった。私たちはほとんど学業を放擲して、勤労働員にかりだされていた。横浜の近くの工場の寮に泊り込みで作業をやらされたことがあり、私は泊るのがいやで、一日だけ泊って、あとは通勤にしろったのだが、その一日だけの泊りの晩に点呼があった。私たちはながい廊下に一列にならばされ、番号をかけさせられた。

一、二、三、四というふうに身幹順に番号を言って行く。そのとき服部は私のひとりおいた左どなりに立っていたのだが、服部のところへ来て、番号がとだえてしまった。

いままでリズムカルにでききひとりひとりの口からとびだして行ったものが、ふいにとだえて、そこだけ空白が生れるというのは、一種異様なものであった。私はどうしたのだろうかとおもった。しかし前をまっすぐ見つめていなければならぬので、横の服部のようすをうかがうわ

けにはいかない。

すると教授がとんで来て、どうした、とかなんとか言いながら、服部の前に立った。それでも服部の口から一言もことばはもれなかった。

「よし」

と教授は言い、番号をもういちどかけなおさせた。すると、やっぱり服部のところへきて、ぶつんと緊張していた糸がたちきれるように、番号の流れがとだえてしまうのである。私には、なぜそうなるのか、わからなかった。

教授はしばらく服部のほうをふしぎそうに見つめていたが、

「よし、先をつづけろ」

と言った。

けつきよくそのままでぶじにすんだ。私はあとで服部にさつきはどうしたのか、と聞いてみた。服部はきまりわるそうな微笑をいろいろのわるい頬にうかべて、

「ぼくは、どもりのくせがあつてね、あまり緊張すると、ことばが出なくなるんだ」

と言った。

私は服部という男の持っている一面がある程度それでわかったような気がした。私はそういう生理的な弱点をひとつの軸としてかれの人生が動いているさまを、想像してみたのであった。

しかし服部はいつもいつも番号が言えないというのでは、ないようであった。その工場の寮で、その後、服部はちゃんと番号が言えるようになったかどうかは、私とその寮を出てしまったので、わからなかった。

服部が軍隊にはいったのは、私なんかよりおそかったとおもうのだが、かれは満州へ持っていかれ、終戦後、シベリアで抑留生活を送ることになった。

そのためにかれの復学はずっとおくらせてしまい、当時、私たちのあいだには、チョピンは死んだ、といううわさが立った。そのかれがひょっこり生きて帰ってきたのだった。

かれは、チョピンという綽名をあたえられていた。じっさいに、かれがそう言ったのかどうかはわからないのだが、ショパンの綴りを見て、チョピンと発音したことから、そう呼ばれるようになったということであった。

じっさいにかれに、そんなことがあったのかどうか、私は知らない。また、そんなことがあったとしても、服部が、そういう知識が貧しくて、うっかりチョピンと読んでしまったのか、それとも知っているくせに一種のサービス精神からことさらそういう読みかたをしたのか、そのへんのことも私にはわからない。

もし、かれが戦死でもしていたら、このチョピンという綽名は哀愁をおびてひびいたことだろう、とおもう。

服部がカメラ愛好家で、とりわけ八ミリに凝っているということも、私は結婚式のテール・ブスピーチでおしえられたのだった。

ひとりの同僚はこんな話をした。

「服部君はカメラに凝っていて、しかもそれがじつにうまい。クロウトはだしなんです。ですから何かなかまうちのあつまりがあると、いつも私たちは服部君にたのんで、記録係の役目をやってもらいました。あるとき、ひる休みにかが何か一生けんめい本を読んでいるので、めずらしいこともあるもんだな、とおもい、のぞいてみたら、なんとゴルフの指導書なんです。なんだ、お前、ゴルフなんかはじめるのか、と申しましたら、いや、そうじゃない、じつはこんど、あるところから、ゴルフ大会の写真をとってくれ、とたのまれた、そのためにはひととおりゴルフの基本的な知識を身につけておかなければならないから、いま勉強しているところなんだ、と、こういうわけなんです。どうせおあそびの写真なんだから、適当に、とっておけばいいはずなんです、そういう場合でもそれだけ念入りにやらないと気がすまないだろうとおもいます。服部君というのはそういうひとなんです」

結婚後、十日ほどたって、私は服部の新居を訪ねた。

昔の学校なかまを数人招いて、いっしょに食事をしようということだったのである。

食事がすんで、雑談にはいったところ、服部が私の横に来て、小さな声で、

「きみにちよつとみせたいものがあるんだけどな」

と言った。

ほかのなかまにでなく、私にだけみせたいような口ぶりだった。私は何だろうとおもった。

「いや」とかれは言った。「きみが興味を持つかどうかわからないけど」

私は、よくわからないままに、ぜひみせてもらいたいと答えた。すると、服部は、ちよつと、  
と言い、ふたまつづきのアパートのとなりの四畳半のほうへ私をひきいれた。それから台所に  
いる細君にむかつて、

「安子」

と声をかけた。

その声のかけかたはちよつとえんりよしているようで、ひどくぎこちなかった。

安子夫人が顔を出した。

「あれ、どこへやった、山の——」

安子夫人が、私にはききとれない声で、何か言った。服部は、私をのこしてとなりの六畳のほうへ行き、しばらくして、何かぶあつい本のようなものを手にして戻ってきた。

「これなんだけどね」

それは原稿用紙をとじて、厚紙で製本したもので、「昭和二十四年三月・白馬岳遭難報告書・みどり山岳会」と表紙に毛筆で書かれてある。

四百字詰原稿用紙に、きれいなヘン字で書かれており、百四十枚ほどのものであった。

「じつは、女房の兄貴が白馬で、遭難したときの記録なんだ」

と服部は言った。

「これをどうするの？」

私は相手の真意をはかりかねてそう言った。

「どうするってわけじゃないけど」服部は眼鏡のおくの眼を神経質そうにぱちぱちさせた。「あるいは何かきみの参考にもなるかとおもってさ」

そう言えば、結婚式のととき、親戚のものかだけれが、新婦の兄さんは山で亡くなったというふうなことを言ったな、と私はおもいだした。

私は、安子夫人のほうは、いったい、この兄の遭難記録を他人の私の眼にふれさせることにたいしてどう考えているのだろうか、と気になった。

もしかしたら、安子夫人はいやがっているかもしれないではないか。

「おくさんは、いかがですか」

それで私はそう聞いたのだった。

「はあ？」

安子夫人は妙な顔をして私のほうを見た。きれいなひとだな、と私はおもった。

安子夫人には私の聞いたことの意味がよくのみこめないふうであった。

「これをお借りしてもよろしいんですか」

私はこんどはそう聞いてみた。

「はあ、どうぞ」

安子夫人は、はずかしそうに言つて肩をすばめるようにした。それは私の妻には全くみられない風情であつた。

「きみは山は好きか」

と服部は言つた。

「好きもきらいも、全然、のぼつたことがないし、まあ、無関心なんだな」

「これは」服部は顔を安子夫人のほうに向けて言つた。「女のくせに山が好きでね、兄さんが遭難した場所を見に行くんだと言つて、出かけて行ったこともあるんだそうだ」

私は安子夫人の顔を見た。

「へえ、そうですか」私はほとんど無意味にそう言つた。

「はあ」と彼女ははきはきした口調で言つた。「遭難した年の夏に行つて、お墓をたててきたんで